

Q



池窪弘務

一 プロローグ

——物語は無垢で仕事熱心な青年大谷光一君が、戸建て住宅団地の一番奥にある小さな家のインターホンを押したことから始まった。

彼がマニュアルやパンフレットがぎっしりと詰まった鞆と、一体二kgの商品が入ったキヤリーバッグを引きずりながら、百軒あまりの住宅団地に迷い込んだのは、二〇二六年七月二十三日の大暑、最高気温四十度を記録した日だった。

彼の目的地が奈良県S郡T町大字Tの明生^{めいせい}団地だったので、迷い込んだという表現は適切でないかもしれない。しかし、汗まみれになり、意識もぼんやりして、ひたすらにインターホンを押して歩く彼の姿は、迷路に迷い込んだハツカネズミのようだった。

彼は犬型ロボット『愛慕^{あいぼ}』、——すなわち僕の——、セールスマンである。昔はS社の製品であったが、今は中国で作っている。技

術力の高い中国にS社が丸投げしてしまった。それをS社が逆輸入している。名前も『アイボ』から『愛慕^{あいぼ}』になった。

二

彼の仕事は7時八時きっかりに届く会社からのメールを見ることから始まる。会社に行く必要はない。メールには今日一日の彼のスケジュールが分刻みで書かれている。現地までは1時間半かかると分かって少しホツとした。行き帰り三時間はGPSを気にせずにすむ。

大谷光一は1DKの社宅に住んでいる。玄関からトイレと風呂、次に台所と居間、寝室が続く。独り暮らしには十分すぎる住まいである。一つの階に全く同じ部屋が十個並んでいる。部屋と言うよりユニットと言った方が適切だろう。十ユニットが五階建てのビルにきっちりと収まっている。ルービックみたいな。彼はその三階の五号室に住んでいる。都

会の真ん中だから、何らかの雑音はいつもしている。人の声、車の音、電車の音、悲鳴。セールスマンが都会に住む理由は、交通の便がよいからだ。何処にでも行ける。セールスマンは何処にでも出かける。

三

光一は一浪して大学に入り、バスケット・ボールに熱中しすぎて留年した。バスケット・ボール同好会は、人数が揃えばじゃんけんで敵味方に分かれ、バスケットに興じる気楽な集まりだった。男女も区別しなかった。ただ、眼の前でバストがゆっさゆっさと揺れるのには少し閉口した。

彼は大学にいる時はいつも体育館にいた。競技をしている時以外は、場所取りに奔走していた。たとえ三十分でも体育館のコートが空くと、LINEで仲間を集めた。学部も服装もバラバラな連中が三々五々集まって来た。多すぎる時はじゃんけんで選んだ。誰も来ない

時もあった。その時は、一人のエアバスケット。

同好会の中で、彼だけがバスケット部の正規のユニホームを着ていた。ルールもアバウトで、ひたすらボールを取りっこして籠に入れるのに熱中した。いつもどちらが勝ったのか不明のまま終わった。

そうしているうちに落第した。

四

一人っ子だったので親も大目に見てくれた。ようやく卒業して、駄目元でS社の入社試験を受けた。S社の子会社で定年を迎えそうな光一の父親が勧めたからだ。父親にコネがあったわけではない。父親は、まさかと言うこともあると泥酔のついでに、光一に言った。光一はそれをまともに受けて、受験した。

入社のペーパーテストは下の方から数えた方が早かったが、常務の一人が彼を強く押し

た。

——近頃では珍しい無垢な目をしている。

常務は十年程前に大リーグで投打の二刀流で活躍した大谷翔平のファンだった。面接に現れた光一は、上下に十センチほど縮めた大谷翔平にそっくりだった。大谷翔平も野球一筋の無垢な目をしていて、大谷光一もバスケット一筋の無垢な目をしていて。

光一の父親は手放しで喜んだ。——息子がS社に入社しましてねえと、聞かれもしないのにまわりに言っただけで廻った。

常務の気まぐれで入社した彼はいきなり壁にぶつかった。一台も愛慕が売れなかったからだ。同期入社秀才達は次々に愛慕を売りまくった。彼らは言った。——時代が売ってくれるのだよ

五

確かに世の中は孤独な老人で溢れていた。彼らはペットを飼うには年を取り過ぎていた。実際に飼い主に死なれ餓死するペットも世の

中に多数いた。死んだ飼い主をペットが食べてしまうという痛ましい事件も起きた。

そんな世相を背景に愛慕は売れに売れ、品切れさえ心配された。だが、彼は一台も売れなかった。彼の心の奥底に、彼さえも気づいていない疑念があった。それは水晶の欠片かひのようにいつもキラリと光っていた。

——年寄りを騙していないかという疑念だった。

六

八時半きっかりにGPS付きのスマホを内ポケットに入れて光一は部屋を出た。「行つてきます」

と、声に出して言う。

エントランナスでいつも出会う女性がいる。彼女の名前は、山本沙苗さなえ。彼女が覗いていた郵便受けに書いてあった。何階に住んでいるのかは知らない。彼女の動きは速い。挨拶する間もなく、光一の視界から消えている。彼

女は真っ直ぐにS社に向かうのだろう。自分
は誰と出会うかも分からない旅に出る。

七

ビルの谷間を十分程歩いて、地下に潜れば、
大阪駅に出る。人が固まりになって動いてい
る。まるで蟻の集団だ。これでも在宅のサラ
リーマンが増えて、通勤客は去年より一割は
減ったと言う。環状線に乗りJR鶴橋で近鉄
の鶴橋駅へ乗り換える。ここもまだ都心へ進
む通勤ラッシュは終わっていないが、鶴橋駅
から出て行く電車は、ガラガラだ。夏休みだ
から学生もほとんどいない。冷房がよく効い
ている車内は快適だった。彼は遠足にでも行
く気分ですみずつ田んぼが増えていく車窓を
眺めていた。やがて電車がトンネルをぬける
と、奈良県である。

八

橿原市の大和八木駅から乗り換えて二つ目

の笠縫駅で降りた。無人駅だった。都心まで一時間半の通勤圏とあるが、この時間は誰も乗り降りするものはなかった。自動改札をぬけると、蟬の声は夕立のように落ちてきた。スマホで道順をチェックする。川に沿った細い道の方が近そうだ。だが、簡易舗装の道は、キャリーバッグを転がすのに適していない。鞆と一緒に運ぶのは難儀だった。鞆を肩にかけてキャリーバッグを転がすと、全身から汗が噴き出した。汗はすぐに乾き塩になった。駅前にあった自販機で水を買うべきだったと後悔したが遅かった。墓場の向こうが国道らしい。竹藪の横をぬけると国道を挟んで巨大なスーパーマーケットの看板が見えた。あそこで水を買おう。しかし、GPSに記録が残るから長居は出来ない。昼食には早すぎる。

九

スーパーマーケットは意外と閑散としていた。出会うのは老人ばかりだった。自動販売

機でスポーツドリンクを買った。五百mlを一気に飲み干した。もう一本は三五〇mlにした。これ以上荷物を増やしたくなかった。

スーパーマーケットの北側は道路になっており、道路に沿って川が流れていた。歩いてきた川である。国道を潜りまた現れた。ここから名前が『かがり川』と変わるらしい。橋の名前が『かがり橋』になっていた。

百メートルほど川に沿って歩道を歩けば閑静な住宅団地に入る。目指す明生^{めいせい}団地は、スーパーマーケットの巨大な影に隠れるように肩を寄せ合っていた。

十

団地の入り口にある鳥瞰図を見ると、川沿いの道路は真っ直ぐ東に延びている。その道と並行して二本の道路がある。団地を横切る百メートルほどの北南の道路が四本。九つのブロックの間にぎっしりと名前が書かれた家がある。よく見ると名前が白いペンキで消さ

れた家が混じっている。

川に沿ってフェンスがはられている。川の向こうにも住宅団地がある。フェンスに沿って五十センチほどの土手があるが、雑草に被われている。花壇も無残な姿になっている。

光一はとにかく一軒一軒インターホンを押していこうと思った。

真夏の真昼、インターホンは一服の清涼剤を得るための唯一の手段でもあった。とにかく冷房の効いた場所に入りたかった。しかし、インターホンを押す度に期待は裏切られた。ほとんど応答がなかった。たまに相手が出て、名乗ると無言で切られた。